

[普及事項]

成果情報名：モモうどんこ病に対するSDHI剤の防除効果

研究機関名 果樹試験場 生産技術部
担当者 高橋友樹

[要約]

モモの落花10日後にSDHI剤（インピルフルキサム剤、ピラジフルミド剤）を1回散布することでモモうどんこ病を防除できる。

[キーワード]

モモうどんこ病・落花10日後・SDHI剤・インピルフルキサム・ピラジフルミド

[普及対象範囲]

県内のモモ園

[ねらい]

本県の「あかつき」、「黄貴妃」ではうどんこ病菌 (*Podosphaera leucotricha*) による果実の毛じ障害が増加している。防除対策として、うどんこ病に効果の高いSDHI剤があるが、本県ではモモのうどんこ病に対する試験事例や効果的な防除時期についての知見がない。そこで本県におけるモモのうどんこ病の生態を調査し、SDHI剤の本病に対する効果的な使用方法を明らかにする。

[成果の内容及び特徴]

- 1 「あかつき」幼果へのモモうどんこ病の感染時期は落花5日後～落花20日後である（図1）。
- 2 モモうどんこ病の発病果率はSDHI剤（インピルフルキサム剤またはピラジフルミド剤）を散布した区がDMI剤を散布した区よりも低い（表1）。
- 3 モモの落花10日後にSDHI剤（インピルフルキサム剤またはピラジフルミド剤）を1回散布することでモモうどんこ病の発病果率を低く抑制できる（表2）。

[成果の活用上の留意点]

- 1 モモにおけるSDHI剤耐性菌の発生リスクを考慮し、SDHI剤の使用回数は年間2回までとし、本剤は保護殺菌剤に混用して使用する。

[具体的なデータ等]

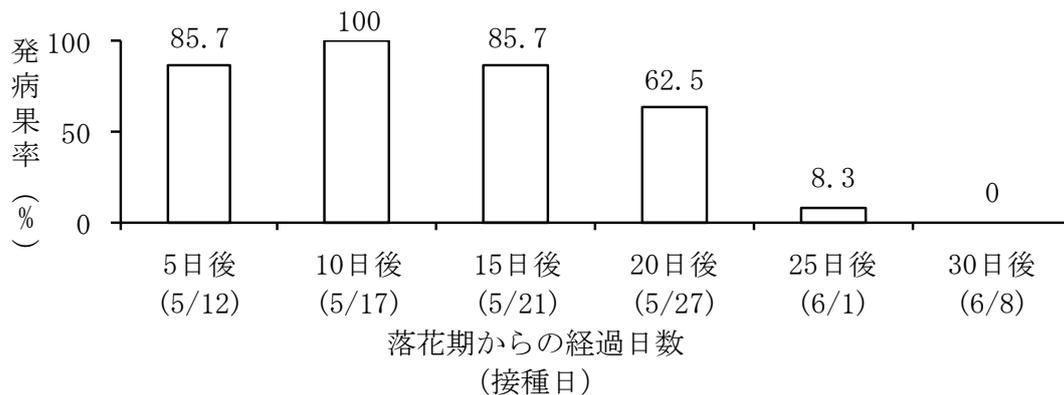


図1 落花後のモモ幼果に対するうどんこ病接種時期と発病果率の関係 (2021年)

落花期：5月6日 調査日：7月16日 (落花70日後)
 供試樹：「あかつき」/おはつもも、7年生、3樹
 各接種日で30果に対し、うどんこ病の分生子を接種した。
 果実は各接種日まで被袋し、接種後は調査日まで再度被袋した。

表1 落花10日後にSDHI剤を散布した体系のモモうどんこ病に対する防除効果 (2021年)

試験区	散布薬剤			A園		B園	
	落花期* ¹	落花* ² 10日後	落花* ¹ 20日後	調査 果数 (個)	発病 果率 (%)	調査 果数 (個)	発病 果率 (%)
インピルフルキサム剤 散布区		インピルフルキサム剤 (SDHI剤)	クレソキシム	150	2.7	300	5.0
ピラジフルミド剤 散布区	シフル フェナミド剤 4,000倍	ピラジフルミド剤 (SDHI剤)	メチル剤 (QoI剤)	150	4.7	300	3.0
慣行散布区		テブコナゾール剤 (DMI剤)	2,000倍	150	8.7	300	7.3

供試樹：「黄貴妃」/おはつもも、8年生 (A園：1区1主枝3反復、B園：1区1樹3反復)
 薬剤散布日：5月21日 (落花10日後) 調査日：6月28日 (落花40日後)

*1：各区の落花期、落花20日後の散布薬剤にデランフロアブル600倍を混用した。
 *2：A園ではアグレプト水和剤1,000倍、B園ではクプロシールド1,000倍(クレフノン100倍加用)を各区の落花10日後の散布薬剤に混用した。落花20日後以降は全区で慣行の防除体系に従って防除した。

表2 落花10日後のSDHI剤1回散布体系によるモモうどんこ病の防除効果 (2022年)

試験区	散布薬剤			調査果数 (個)	発病果率 (%)
	落花期* ¹	落花10日後	落花20日後		
A区		インピルフルキサム剤 (SDHI剤) 4,000倍* ²		104	2.9
B区	無散布	ピラジフルミド剤 (SDHI剤) 2,000倍* ²	無散布	124	4.8
無散布区		無散布		94	100

供試樹：「あかつき」/おはつもも、8年生、3樹 (1区1主枝2反復)
 薬剤散布日：5月20日 (落花10日後) 調査日：6月20日 (落花40日後)

*1：落花直後～落花20日後まで接種源 (*Podosphaera leucotricha* 発病リンゴ苗) を設置した。
 *2：A、B区では落花10日後にクプロシールド1,000倍(クレフノン100倍加用)を混用した。
 落花20日後以降は慣行の防除体系に従った。

[その他]

研究課題名：秋田県におけるモモうどんこ病に対する薬剤耐性リスク低減防除体系の確立
 研究期間：令和3～5年度
 予算区分：配当 (植物防疫・農薬安全対策費 (水田総合利用課))
 掲載誌等：東北農業研究第76号 (2023)